

# 委員会は何を審議してきたのか

## 1 審議の方針

出演者が行った番組の核心部分に虚偽の編集があるという指摘と、それを受けたフジテレビの調査報告書には、騒ぎの直接のきっかけとなった放送回以外にも、複数の放送回の制作過程において問題があったことが指摘されている。そこで委員会は、まず審議の対象とする放送回をどうするかについて議論をし、その結果、2013年10月20日の放送に加えて、同じ出演者とディレクターらスタッフがかかわり、フジテレビが調査によって演出上の問題を認めた2011年10月16日と2012年10月21日の放送についても審議の対象とすることにした。

基本的にバラエティー番組は、制作者と出演者が協力してある種の「虚構」をつくりあげ、それに視聴者が安心して身をゆだね、楽しむという、二重の了解の上に成り立つ。したがって、情報系バラエティーを除いて、そこに報道番組の倫理基準をそのまま当てはめることはできない。そうしてしまえば、「バラエティーという表現形態の持つ特性それ自体を殺してしまう役割を委員会が演じることになりかねない（決定第7号、40ページ）からだ。

委員会がまず関心を抱いたのは、何度も番組に登場して、視聴者を楽しませる「虚構」を一緒につくり上げてきた出演者が、なぜ過去の出来事も含めて、一気に不満を吐き出すに至ったのかである。また、それまで幅広い年齢層の視聴者が高く評価していた番組に対して、出演者が編集に虚偽があると指摘したとたんに、なぜ「裏切られた」という声があがったのか。委員会は、その理由が、この10月20日の放送の、画面には映らない制作過程の中にあるのではないかと考えた。そこにこそ、番組が抱えていたリスクが現実化し、制作者・出演者と視聴者間の「二重の了解」が崩れた契機があるはずだからである。

委員会は、2013年12月にフジテレビから提出された報告書と2014年1月に実施した関係者8人に対する聴き取りの結果に基づき、制作過程で何が起きていたのかを明らかにし、その放送倫理上の問題を検証することにした。

審議を進めるにあたっては、以下の点を踏まえることとした。

委員会は、バラエティー番組を扱う際、一貫して「演出論」には踏み込まないよう注意してきた（決定第7号、第13号、第15号）。どこまでが演出として可能なのか、許容されるのか、という個別事例における境界線の設定は、局の自主的・自律的な判断に委ねてきたのである。今回の審議についてもその先例にならう。

審議の主な対象は、出演者が虚偽の編集があると指摘する直接的なきっかけとなった10月20日の放送に絞るが、審議の対象としたそのほかの2回の放送

については、10月20日の放送につながる問題がなかったかどうかを検証する。

## 2 審議の対象とした放送

委員会が審議の主な対象としたのは、2013年10月20日に放送された『ほこ×たて 2時間スペシャル』の4つの企画のうち「どんな物でも捕えるスナイパーVS絶対に捕えられないラジコン」と題されたコーナー（以下「本件放送」という）である。アメリカ人スナイパー（狙撃手）3人が、日本人が操縦するラジコンボート、ラジコンカー、ラジコンヘリを一定時間内に実弾で狙撃できるかをテーマとした団体勝ち抜き戦の対決で、スタジオでのトークやCMも含めて32分37秒の放送であった。

コーナーの最初に、この対決の出演者が紹介される。全米から集結した最強スナイパーとして、男性スナイパー2人と女性スナイパーが登場する。続いて世界に誇る日本のラジコン軍団として、ラジコンカー操縦者、ラジコンヘリ操縦者、ラジコンボート操縦者の3人が紹介される。さらにルール説明として、3対3の勝ち抜き戦で勝負を決めることと、ラジコンの種別ごとの対決場所が説明される。

スタジオでの勝敗予想のトークの後に、対決の順番が紹介される。スナイパー側は中堅の女性スナイパーをはさみ、先鋒、大将が男性スナイパー。ラジコン側は、先鋒ラジコンヘリ、中堅がラジコンカー、ラジコンボートが大将である。

最初の対決は3分間に5発以内の銃弾でラジコンヘリが被弾するかどうかというルールで争われた。2分13秒後にヘリが被弾して、この勝負はスナイパー側の勝利となる。

続いて、勝ち抜いた男性スナイパーとラジコンカーの対決が夜になって行われる。こちらのルールは2分間に5発以内の銃弾での対決である。必死の操縦にもかかわらず、残り時間1秒になった時点でラジコンカーが被弾して、スナイパー側が連勝する。

翌日にラジコンボートとの対決が、小さな湖で行われる。対決のルールは、湖の100メートル区間をラジコンボートが走行する間に、弾数無制限で被弾するかどうかである。この対決では、ボートが前日勝ち抜いた男性スナイパーにまず勝利、続く女性スナイパーにも連勝し、最後の大将戦にも勝利する。この結果ラジコン軍団の勝利となる。最後にスタジオに戻り、日本側の起死回生の勝利をスタジオのタレントたちが喜んでこのコーナー企画は終了する。

対決そのものの放送は、ラジコンヘリとラジコンカーがそれぞれ4分程度、ラジコンボートは3試合分で約9分であった。対決後には、敗者のコメントも紹介されているが、ラジコンカー操縦者のものは紹介されなかった。

\*

後にインターネット上で番組の制作過程に重大な問題があったと指摘したのは、こ

のラジコンカー操縦者（以下「操縦者」という）である。『ほこ×たて』の出演はこの回が4回目で、過去3回の対決の相手は「鷹」「猿」「釣り師」だった。このうち、「鷹」と「猿」との対決企画も審議の対象としたので、その概要を以下に記す。

「鷹」との対決企画は、2011年10月16日、ゴールデンタイム昇格後最初の放送となる3時間半スペシャルの中で「どんな獲物でも捕まえるタカVS絶対に捕まえないラジコンカー」と題されて放送された。鷹匠が操る鷹が、3分以内にラジコンカーに取り付けた疑似餌を捕捉できるかという対決だった。2分ほど経過した時点で鷹が疑似餌を捕らえて勝利した。

「猿」との対決企画は、その1年後、2012年10月21日の2時間スペシャルの中で放送された「どんな物でも捕まえる猿VS絶対に捕まえないラジコンカー」である。追いかける3匹の猿から、ラジコンカーが制限時間の3分を逃げ切り、勝利した。